

## 書物と糊

庄司浅水

一冊の本は糸や針金で綴じ、膠や糊などの接着剤を用いてまとめ上げる。

ところで、本の歴史を繙くと、その形態は洋の東西を問わず、卷子本(巻物)ではじまる。

古代エジプトでは、ナイル河畔に繁茂するパピルス(Papyrus) — 「紙」(paper) の語原 — という水草の茎の髓で紙のようなものを作り、それを継ぎ合わせて書写の料に供した。これを巻物の形にしてヴォリューム(volumen)と呼んだ。「巻かれたもの」の意で、本を一巻(one volume)、二巻というのはここから来ている。

当時パピルスを継ぎ合わせるのに何を用いたか。「膠様のもので」とあるが、おそらくアラビアゴムなどが使用されたのではあるまいか。アラビアゴムはアフリカ西岸・ナイル河地方に産する、アラビアゴムの木から採取するもので、ゴムの木はマメ科の常緑高木、高さ七メートル内外、葉は羽状の

複葉、白い花が球状に集まって咲く。幹の分泌液をかわかしで固めてつくる。成分は複雑な高分子多糖類で、水によく溶け、コロイド溶液を作る。今日文房具店などでも売っているもので、接着剤などに使われている。

本の接着剤としては膠と糊がある。

糊といっても一様ではなく、用途によって、種々の材料でつくったものが用いられる。磐石糊・生麩糊・姫糊・微塵粉糊・蕨糊・デキシトリン(可溶性澱粉)・蛋白糊・カゼイン(酪素の一種)・化学糊(ポンド糊など)などがある。

磐石糊は小麦とライ麦でつくったもの、生麩糊は小麦粉を水で練り固め乾燥させたもの、姫糊は粳米こむぎもちからつくる(これにサリチル酸か硼酸のような防腐剤を入れるとゴム糊ができる)。それぞれ向き向きがあつて、たとえば生麩や姫糊に磐石をませ合わせたものは粘着力が強く、姫糊や生麩糊でよく着かないものに用いられる。しかし通常は姫糊や生麩糊で用

が弁じ、姫糊と生麩糊とでは前者の方が粘着力がある。

姫糊は米、生麩糊は麦から出来ているので、同じ糊でも性質が違う。どちらも千倍ないし二千倍の石炭酸（フェノール類）か昇汞水（水銀）をまぜて腐敗を防ぐ。製本用としては姫糊は主として貼り付けものに用い、生麩糊は表紙の見返し紙の糊入れ（表紙と見返し紙との貼り合わせ）や、板紙の貼合わせ、紙の裏打ちなどに使用される。糊に少量のフォルマリン溶液を加え、よくまぜ合わせ（腐敗を防ぐため）、香料を加えれば市場で売られているヤマト糊と同じものができる。

明治期以前のわが国の本の多くは、ほとんど和紙を用い、和装本（和とじ）であった。和装本はよく「紙魚の棲家」などといわれる。和紙には紙魚の好む材質がふくまれているが、和装本には角ぎれその他糊を使う部分が多く、紙魚や鼠などの虫害にかかりやすい。貴重な古写本や古版本がひどく虫喰いにあっているのを見ると悲しい想いがする。

むかし装潢匠（そうこうしやう）といった和本の製本師や表具師などは、生麩糊をたくさん造り、大きな土瓶に入れ、床下などの涼しい所に何年間も保存しておいた。糊がよく練れて使い易くなるのかも知れない。

洋装本の背固め・背貼り、表紙貼り等には、接着剤として膠が用いられる。膠は魚や獣の皮・骨などから精製される。海外では用途によつて背貼り用にはフレキシブル・グルー、表紙貼り用にはコールド・ブック・グルーが使用される。

革装の表紙作りには糊、製本用クロスの表紙貼りには膠、布装や紙装の表紙には糊を用いる。用途によつて膠も糊も溶液の濃淡が工夫されなければならない。また寒暑によつて防腐剤や乾燥を防ぐ処置も適当に講じなければならない。

最近、糊や膠の代りに「ボンド糊」などの商品名で売出されている、合成樹脂系の接着剤が多く見られるようになった。アクリルニトルを加水分解してアクリル酸とし、これにメチルアルコールを作用させ、溶剤に溶解したアクリル系樹脂接着剤や、ポリ酢酸ビニールにアセチレンを作用させ、溶剤に溶解したビニール系樹脂接着剤は、革やクロス・布・紙などの接着、貼合わせなどによく用いられる。ことに最近のように製本が大量化され、機械化されるにしたがい、樹脂系接着剤の用途はますます拡大するばかりである。

だが、手工的な手づくりの製本には、化学糊ではない従来の糊や膠が使われており、愛着をおぼえる。